

カフ・システムとは/アドバンスド・カフ・システム ACS-12A のご案内

株式会社トライテック

テレビ/ラジオ局のアナウンサや、映像作品にナレーションをつけるナレータが、本番中に咳やくしゃみをしたくなったらどうすればよいでしょうか？ 調整室のミキサーに合図をして、音声調整卓のボリュームを絞ってもらうだけの(時間的) 余裕があればよいのですが、そうはいきません。

そういう時のために、アナウンサやナレータの手元に F.U. (フェージング・ユニット) と呼ばれる専用のボリュームを用意しておき、必要なときに自分で操作できるようになっています。テレビのニュースなどでアナウンサが操作しているのが画面に映ることがあるので、「ああ、あれか」と思われる方も多いと思います。この F.U. のことを、通称『カフ (Cough=咳) 』あるいは『クシャミ・キー』などと呼んでいます。また F.U. 装置を含めた音声系統を、『カフ・システム』と呼んでいます。

従来の『カフ・システム』では、アナウンサやナレータの使うマイクロフォンの信号を調整室の音声調整卓に引き込み、それを一度アナウンサの手元まで戻して F.U. を通し、再び音声調整卓に引き込むという方法でした。なぜ一度音声調整卓に引き込むかというと、アナウンサやナレータが F.U. を上げ忘れて音声が出なくなってしまうときに、音声調整卓側で強制的に音声を通すためです。

この方法では、微弱なマイクロフォン信号を長い距離引き回さなくてはならず、音声信号の劣化が避けられません。また劣化を極力押さえるために F.U. は金接点の高級部品を使っており、大変高価です。

株式会社トライテックが開発した『ACS-12A アドバンスド・カフ・システム』は、こうした従来のカフ・システムの欠点をすべて解決した画期的な製品です。

ACS-12A ではアナウンサが操作する『操作部』と、音声信号のオン/オフなどをコントロールする『音声処理部』を分離しました。これにより音声信号は『音声処理部』のみで処理されるために音質の劣化が起こりません。

『音声処理部』では外部ヘッド・アンプで増幅された音声信号を、高度な回路技術によって優れた音質のまま音声調整卓に送り出しています。また調整室からアナウンサのヘッドフォンにモニタ信号を送出する『フォールド・バック機能』や、アナウンサが調整室側とコミュニケーションを取りたい場合に使う『バック・トーク機能』など、使う側の立場に立った機能が充実しています。

また『操作部』では微弱な音声信号を扱わないので、より高度な制御が可能になりました。特に使い慣れたF.U.と、ニュー・スタイルの『タッチ・スイッチ』を併用するという画期的なアイデアによって、操作性が著しく向上しました。

ところで、アナウンス・ブースに設置する『操作部』には一般的なスイッチは使えません。なぜなら敏感なマイクロフォンによってスイッチの動作音が録音・放送されてしまうからです。

ACS-12Aの『操作部』にはメカニカルな動作音がない『タッチ・スイッチ』を採用しています。

『タッチ・スイッチ』は指先で軽く触れるだけで確実に動作し、動作表示灯を兼ねているため視認性に優れています。しかも高度な制御システムによって、F.U.を上げて音声信号をオンにし、それをタッチ・スイッチでオフにするというような操作も可能にしています。

ACS-12Aの『操作部』に採用したF.U.は、実際に音声信号を通す仕様のもので、実際は位置情報だけ読み取ればよいのでここまでのクオリティは必要ないのですが、F.U.の操作感を重視して高級部品を採用しています。

『アドバンスド・カフ・システム』というコンセプトで製品開発を始め、初代ACS-10を発表してから既に20年の歳月が経とうとしています。それまで市場になかった製品であったにも関わらず、ACS-10は多くのお客様にご支持をいただき、今でも日本中の放送局・録音スタジオで活躍しております。

ACS-12Aは皆様より寄せられた多くのご意見・ご感想を参考にし、旧製品より更に高機能・高音質そして低価格を実現して登場しました。今では『カフ・システム』の代名詞と言っても過言ではないと自負しております。

カフ・システムをご検討の際には、ぜひ株式会社トライテックの『ACS-12A アドバンスド・カフ・システム』をご採用くださいますようお願いいたします。